
怪盗 i c e の予告状

頼白井

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

怪盗iceの予告状

【Nコード】

N7088A

【作者名】

頬白井

【あらすじ】

なんともダラけた新聞部に、怪盗からの予告状が舞い込んだ！予告どおり原稿は盗まれてしまうのか？怪盗iceの正体は？新聞部員の二人がダラけたままで挑みます。

怪盗 i c e の予告状

(前書き)

この物語はフィクションであり、実在の人物、怪盗、予告状とは一切の関係はありません。……怪盗？予告状？

一日目

「ヒマだねえ……」

春日ツクシ（かすが つくし）は、新聞部部室の机に突っ伏すと、そう呟いた。普段は元気いっぱいの彼女だが、いまはダラダラとしていて、覇気がない。

「嵐の前の静けさだろ。夏休み前になれば、去年みたいに文化祭の出し物が決まる。そしたら、『ヒマ』なんて言ってるヒマがなくなるぞ」

同じく新聞部の桜井龍人が、ツクシに声をかける。端正な顔つきに、メガネと、とても知的な印象がある。

「そんな『オール・オア・ナッシング』っぷり全開なスケジュール、止めてほしいなあ……」

「俺もそうしたいけど、まだ第一希望の提出日前だから、事前調査も中間発表の準備もできない」

別々のクラスで、出し物が重複した場合、文化祭実行委員会で協議され、どちらかが変更することになる。その協議前の情報すら、まだない。

「じゃあ、通常原稿は？」

ツクシも解っているはずだが、訊いた。

「俺もツクシも、無事脱稿」

「印刷は？」

「このままプリンタが徹夜」

「来週はどーするの？」

彼らは週刊で新聞を発行し、全校生徒に配布している。社会的なニュースを解説したり、そのニュースが自分たちにどう関わるかを

分かり易く書いているため、人気は高い。社会科の教師が、教材に使ったこともある。

「さあ？ 今週の原稿、2日も早いから、まだ何も」

「頑張りすぎた？」

「かもね」

「帰ろつか？」

「そうしよう」

非常にゆつたりと、二人は帰路についた。

二日目

「大変っ！ 部室にこんな物がっ！」

放課後、龍人が部室に入るなり、ツクシが血相を変えて詰め寄ってきた。

「どんなの？」

龍人が聞き返すと、ツクシはトランプ大のカードを差し出した。

「えーっと、『明日の十七時、原稿を戴きに参上する。怪盗 i c e』

怪盗 i c e？ 聞いたことないな」

「私も」

「『怪盗 i c e』ねえ……解凍アイス……溶けたアイスはマズいだろ」

「……そだね……」

龍人の冗談に、なおざりな反応を示すツクシ。

「ともかく、記事にならないな」

「そーね。『怪盗』なんて非現実的だもんねえ……記事にしたらバカにされるよ……」

彼らは報道のスタンスで記事を書いている。怪盗のような存在の記事など、現実にも起きて非現実なのでネタにできないのだ。

「怪盗ねえ……ツクシ、怪盗といえば？」
ツクシは少し考える素振りを見せてから応える。「ルパンでしょ……紳士でしょ、KIDでしょ……あ、ルパンの三代目もそうだね」「それくらいか？」
「後は……蒼い風」
「誰だ？ それ」
「……まあ、無理は承知だったからねえ……」
ツクシはジュニア小説、いわゆるライトノベルの趣味がある。おそらく、そのあたりに出てくる怪盗なのだろう。
「後、二十面相！」
「それは『怪人』だ」
「じゃあ21面相……」
「それは『かい人』だ、わざとだろ」
「……バレた？」
「新聞部をナメるな」
もともと、相手も新聞部員だが。
「……まあ、怪盗談義はこれくらいで……さてどうしよう」「盗むも何も、印刷終わってたんでしょ？」
「終わってるよ。後は明日の放課後に、職員室の配布物ボックスに入れるだけ」
「じゃあ原稿盗まれたら嫌だけど、別に被害は小さいってことね」
一応、各原稿データは、それぞれがバックアップを取って所持している。盗まれたとしても、痛手はない。
「意味ないな」
「……リユート、ヒマだから相手してあげれば？」
「そうだな。明日CDに焼いて持ってくるか。去年度のデータ」
むしろ同情されているような、怪盗 i c e であった。

三日目、または予告当日

「『部室には警官隊を配備した！ 原稿データCDは厚さ五ミリの強化プラスチックのケースに入れてある！ 怪盗 i c e め！ 盗れるものなら盗ってみろ！』って、言うチャンスなのに、なんでやる気が出ないんだろ？」

ツクシは、大仰なセリフを一息に言いながらも、モチベーションの低下を訴える。予告の時間まで後十分。それなのに、この調子だ。「盗られても困らないからだろ？」

過去のデータを入れたCDは、レベル面に“原稿データ”と書いて、隅にある応接テーブルに置いてある。ツクシのセリフとは真逆で、まったくの無警戒。唯一合っているのはプラスチックのケースに入れてあることだが、強化プラスチックではない上に、厚さ一ミリ程度の普通のCDケースだ。

「なあツクシ、昨日プリントアウトした最新号五百部、持ってってもらおうか？」

龍人の発言に、ツクシは目を見開いて驚く。

「そ……それはマズいでしょ？」

ところが、龍人はまったく澄ました顔。

「別にマズくない。なんなら、最新号のデータを持ってってもらっても構わない」

言いが否や、龍人は応接テーブルに最新号と、そのデータを入れたUSBメモリまで置く始末。

「大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だ」

予告の時間まで、一分を切る。秒針が後一周すれば予告の時間だというのに、龍人はツクシに語り続ける。

「大丈夫だ、絶対に」

「な……なんで？」

そして、十七時のチャイムが鳴ったと同時に、龍人はその理由を

告げた。

「怪盗 i c e は、ツクシだからさ」

「なんで解ったの？」 ツクシはそう言っているが、龍人がすでに見越していることを、理解しているようだ。おそらく、自分が作ったクイズを、龍人がどう解いたかを聞きたいのだろう。

「見た瞬間解ったよ。携帯電話で『ツクシ』は『4』を三回、『2』を三回、『3』を二回押す。この通りに、アルファベットモードで入力すると……」

「ピンポン！」

明るい笑顔で言う。一応“犯人”で、看破された後だが。

「後、この最新号の原稿が、二日も早く脱稿してた。だから今日を予告したんだろ？」

「うん。今日までなら、まだこーゆージョークができるから」

「……他にも、予告状を持ってきたのはツクシ。『怪盗 i c e の相手をすればいい』って言ったのもツクシ……」

「その通りだよ」

「ま、ヒマ潰しにはなったな。さて、怪盗 i c e さん。原稿とか持つてかないんですか？」

龍人は応接テーブルの原稿データCDやUSBメモリを手で指し示す。

「えっ？ バレたんだからいいよ」

「いや、持っていくんだ。最新号を、職員室の配布物ボックスまで」
龍人は笑顔で言う。怪盗 i c e は、山のような最新号の束を、呆然と眺めるのみだった。

(後書き)

超短編という、単発ネタです。ほんの少しミステリってますが、どちらかというところギャグ。まあ、カテゴリは推理ですが。というわけで、お読みいただきありがとうございます。感想等戴けますと、マジで励みになりますし、参考になりますので、よろしく願います。

重ね重ね、お読みいただきありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7088a/>

怪盗 i c e の予告状

2009年7月1日07時59分発行